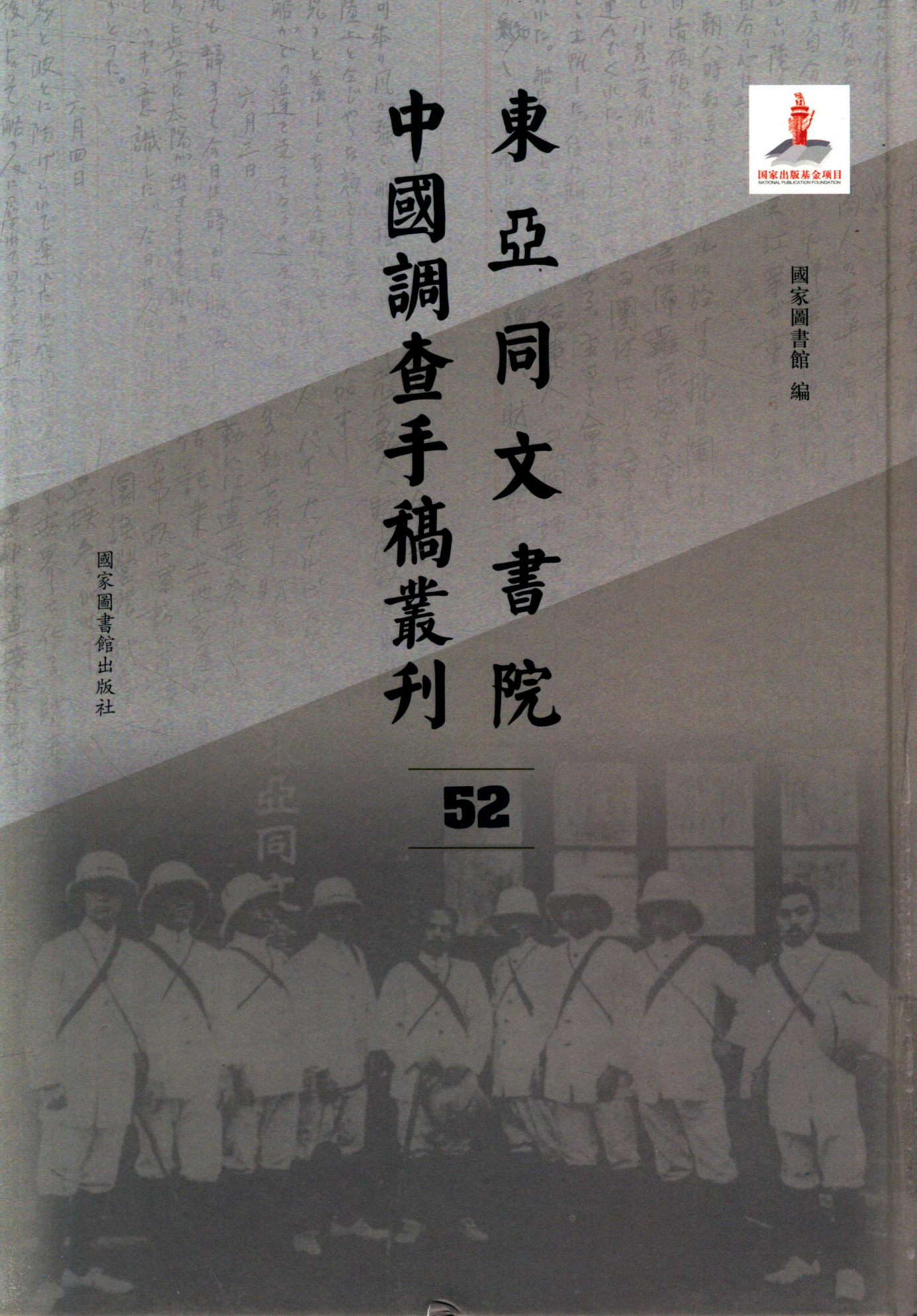


國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

52

國家圖書館出版社





國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

52

國家圖書館出版社

第五二冊目錄

昭和十年（一九三五）旅行日誌（第三十二期生）

飯野雄吉 林田徹 中西亨	第九卷		一
三木義雄 木下勇	第十卷		九三
多田作四郎 出口將夫	第十一卷		二二三
岩滿興三 岡田朝雄	第十二卷		三〇五
小野崎通健 菊勝	第十三卷		三九一
松永勉 田中孝二 太田良祐	第十四卷		四五九
棟元榮次 日高輝雄	第十五卷		五八一

大旅行日誌

河北省游歷班

飯野雄吉
林田徹
中西亨

昭和十年庚申三十二回第二十九回調査報告

新元春 河北有周堂日記

五日（水曜日）晴、

上同文書院書館印

毎に繰返される大旅行が今度には自分等が送る書に
七好半先生方や椿兄の拍子の中は校門を出て
大連汽船碼頭に向った。子竹先生初め椿兄等送る書に
帝王丸は九好出帆。随分混んで居て乗込人、特に婦人
小供の多くて騒々しくバコを千切りながら生キエリを謳う
彼等の様子が終駁するに及ぶ旅の上に一種のセコな感を興へた。
書院に入るとした好が亭を見えて居た大旅行、其の第一歩は
之の使命とか様々なる固苦悩とかの雲が團氣の中は皆何と
なく緊張して居る様に見える。

7
⑥六月六日（水曜日）晴

昨夜晩まで起きて居た故か目を覚めたのは頭の上の露人境は
既に上陸の準備をして居た。二ツキに出て見ると青島は
水兵線、彼方に陸地が見えて居る潮の音が怪なる五重音を
通る聯絡船の上の耳を刺す如き感を感じた。静かに上り込む
青島港は霞み知つて居る様に美しい面を現した。愈々旅の
第一歩と云ふ感じにか何となく不意を引き締めて出迎へよう
と中から芝草やうい人をお色う居た。

十一日未入港、海一人儼然芝草と名乗つて出る人ひき
何か淋しい気持ち、あの長い五重音を廊下を流して
碼頭に出て見たが、矢張り出迎へに来る人は目を見
三千分近く待つて居た。其の中東洋一決して海軍協会の
一海軍を走らした。

青島では幾度かは驚くを聞いて居たのに私等は一通り驚き

相當遠いのだらうと思つて居たのに海軍協會まで税関から僅か
四町程しか無い。上海の錢しか持つて居なかつた私達は車夫から
随分言掛りを付けられて困つた。

孝運にも同協會には偶然二回忘幹事會に來合せて居られた
先輩の方々に會ひ出來て皆ほつと安心した。聞けば與學校より
未だ未着との事ぬなる事かと思つた。早速二室に皆會し、

御挨拶有り又特に平岡氏から青島に於ける日本人勢力並に
弘華經濟一振情勢に關し忠告を承つた。今其の産業の大體を
述べる。

工業

紡績(九ツ)

支那
日本人

日本建設中

10

に達して七の万錠に上る

もう二ある。

又大日本是代表工場、製衣、新工業、二、四工場、ビル工場
等がある。

物産

輸入
物産

〔物産〕 棉花生、小麦、豆、等を輸出し、食料品を輸入す。

現今一般に輸出入盛ならず、其の救済策としては青島濟南間は鉄道を更に延長する事にある。即ち青島―濟南―山西―海州―龍海^{（ま）}で延せば其の地方の棉花、雜穀、毛皮が青島に集り又青島よりは棉布等が内地に入り輸出入盛にならん。又支問題、宣し、折到底不可能事ならん。と云ふであつた。

御出席の芝野氏は平岡氏、中村氏、鶴野氏、立石氏、石橋氏、長瀬氏の諸氏であつた。昼食の後の御馳走になつてから、芝野氏、中村順之助氏、長瀬氏同乗の自動車を支那にて一日ようくして市中見物に出掛けな。

是で青島中を一日走り、競馬場―青島神社を参観し、五時解散し、芝野氏は海軍協會に帰つて夕食後、市中を散歩した。あの跑台の上より見た見れば、静かな海、紺碧の空と、

甚い。海も合する所に有る小さな島、又兩側から並樹したところの
の森になつて居る落着い申をサト音をききながら歩く通す愉快さ
思ひはへたら同子十六名大廣間に枕を並べた

○二月七日 金曜日（晴）

朝は半歩、皆寝て居る中に林田君と海幸通うを歩く
落着い空気を破つてギイギイ細音がせたら申に出る舟は急に
急ぐのであらうが丁が内地の懐村を思はせるものがある。

八時より同班三名青島堵半場を訪れた。刺を通して安んずる
清ふと一名の日本人が来て心ゆく様々説明を刺付けたら
果ては出来た。丁る半面頭を殺したばかりのあとで場内なる所
鮮血におびれて居る惨状たる感かした。 其の中を見え居る

間に料理をせしめ、多量には小供の時から習い知って居る、

青島牛の夕飯には喉を通さなかつた程の不愉快な氣持を感ずた。

三日間の牛馬が一塊、肉となるには一時苦味掛るものさうである。

牛馬の繋留場、牛牛検査場、屠室、製肉庫、冷蔵室、汚物場、

焼却室等と設備は完備して居た、今は日支合併だが独乙時代

の様に腐敗なものは多量に。色々説明書を貰つて直ちに引附た。

頭の上に直射する太陽の下を、あの船の上から見た教金堂に向つた

あやしいな英流で交情した結果、案内する。

小貴に立派な物であつた。此を建てたに當つて日本人の忠告が、

力有つたさうである。塔の一層上から見たすと青島のか金堂の、

中にある。

夕方より夜の青島氣を味ふべく散歩にお掛けた。平和な時、

青島は老練の隠居所と思はるものがある。

日支の合併
の備

日本人
の備

崑崙種一人奇也松仙(金)食夢一人奇朝早仙廣五子仙

九時半の海軍協同会を出席後汽車は暹羅九時半の青島
駅を考へた。諸南より汽車は第六の。特急列車は
井の七五。この暑い中を寝るために、この七五を二週した。

二
日
土
曜
日
(
月
曜
)

初め見る北支泥濘の風景は江南の天地より外に知らぬ物邊
に取らん定に變つてはた、赤土の壁・中には穴居の様な穴あり

之也。軍坂らうと田知らういぬはも藩一般草木は皆乾かいて
倒れ居た。

濟南に近つた女僧取々に來た季代、かわて國を知らず居たが
又ついややと途一人が六十仙を拂はされたのは腹が立つた。

五日後七時二十分濟南に入つた。青島を知らずつたので
領事館より出迎へつたが是を居た。一日濟南は馬鹿

に達し暑やい、かろかうした所だといふ印象の中を領事館に向つた。
和室がある、車代十幾、掃つたが多過ぎる事である。

應接室に待つ事より、朝早くつた同僚の西田大之助、
出たまゝ其の中服部、福田班、南より來るに會つておるた

南を虫に、ワウく食はれた跡を見せ合つて笑つた。
九時半、西田領事には目にかゝる事が出来た。

は控室の後、軍運比支の役所に就ては、つたが濟南に

此の人有りといふやうに居る大に其の抱負は身細されて居られん
振に思つた。

十時三十分市中見物に出かけた。汽車一はさしと仙と村を
めぐるお寺は幾つも北極園にまわつた。更に太公望の釣
しをかうふ大明湖を見下し、又右に清南事件の陣一は中隊
全隊一をかうわゆる、但馬に頭を下したから、また右の
上のトウ、ウエを廻つた。

一軒の飯屋にて朝食兼昼飯をすませた。其の間、他班の連中が皆暑
さの爲に見学中止したか、お寺の三層千佛山に向つた。清南の
南方支那軍の三里山の下からは、仙、鶴子(二人持お寺)か二人
の十仙と云ふのを、仙に値切つて午後、暑熱の之を掛聲かけこゑ
とつた。中腹には臨時代、彫刻とか言はれる千餘の石佛を見て
更に徒歩して、頂上へ上れば、眼下清南の所は勿論、遠く黄河

足の方のしんは今日には四千ふたあそき事であつた。

